「次に何を学び、どのように成長していくのか」をイメージできる

医学部附属病院　総合診療科　医員
木村 彰仁［きむら　あきひと］

―― **医学部卒業後の経緯は？**

2018年に卒業後、高崎総合医療センターで初期研修医を２年間行い、皮膚科医を目指し群大皮膚科に入局。その１年後、総合診療に転向し群大総合診療プログラムに加入。県内の複数の医療機関をローテーションし、2026年４月に群大総合診療科に戻ってきました。

―― **１年後に総合診療に転じた理由は？**

元々なんでも診れる医師になりたいと思っていました。最初は皮膚を通じて全身を診ることを目指しましたが、研修でいろいろ経験するなかで、内科を軸として全身を診るための研鑽を積もうと考えました。この１年の臨床を通じて、皮膚疾患にも対応できる総合診療医として、診療の幅を広げることができました。

―― **肌で感じた、地域医療の課題は？**

医師が前橋、高崎に集中し、その他の地域では医師が依然として不足していて、それゆえに病院によって診療の幅や質が大きく異なること。また、地域医療の中心を担っていく総合診療医がまだまだ少ないことでしょうか。

研修を受けて感じたことを議論に活かす

―― **先生は「ぐんま総合診療医センター」運営委員会の委員ですね。どんな役割が期待されていると思いますか。**

総合診療プログラムを卒業したばかりの医師なので、研修を受けたなかで感じたこと――自分の成長に結びついたこと、指導の方法など――を運営委員会の議論に活かせますし、若手医師と近い目線で教育に関われると考えています。また、学生から研修医、専攻医まで幅広い層に総合診療をアピールすることが求められていると思います。

この構想の大きな意義は、総合診療医としてのキャリアを、それぞれの段階に応じて一歩先まで見通せる形で提示できることだと思います。漠然と「総合診療医」という職業を知るのではなく、「次に何を学び、どのように成長していくのか」を具体的にイメージできる環境が整うことは、大きな魅力になるはずです。

例えば、入学前には総合診療医という職業のイメージを形成し、在学中には総合診療というキャリアの選択肢を具体的に知る機会を提供する。そして研修医になれば、総合診療の実践的な教育を受けることができる。専攻医の段階では総合診療学だけでなく内科・救急科・小児科など幅広い診療科をローテーションしながら、臓器別の知識を深めるだけでなく、それらを統合して患者さん一人ひとりを全人的に診る力を養うことができます。

このように、各ステージが有機的につながることで、より体系的かつ臓器横断的な視点を身につけた総合診療医が育成されることを期待しています。総合診療の魅力を早い段階から伝え、継続的に学び続けられる環境が整うことは、地域医療を支える人材育成にも大きく貢献するのではないかと思います。

―― **地域医療と総合診療をひとことで表すと？**

患者と地域が求める医療に対して、持ちうる限りの能力を提供する

―― **ご自身の強み、関心をもって継続的に調べているテーマは？**

総合診療医としては診断をつけるということにこだわりたいと思っています。教育のための資料や学会・勉強会向けの症例報告などは常日頃から作って蓄積しています。

感染症、自己免疫疾患は特に関心持って勉強しています。総合診療医としてこのあたりの鑑別を進めること、適切な診断をつけることはどこに行っても求められるためです。